子どものいる暮らし―男・夫・父

ラ ヴィータ エ ベッラ

戸田　功

子どもを保育する時、誰でも保育者となるのであれば、私は現在、まあまあの時間、保育者である。といっても、大した心構えがあるわけでもないので、この控え目なコーナーが最もふさわしいかもしれない。ただ、私は、男としてでも、夫としてでも、ましてや父としてでもなく、単なる保育者として書くことにする。

なぜ子どもを育てるのか。それは、そこに子どもがいるからである。実際によく見ると分かるように、人間は、生まれた時から人間である。魂が息付いている。ただ、大人とはコンディションが異なっていて、保育を必要とする。そこで、子どもを迎え

た者は誰であれ、保育することが要求される。それに応えられない者は、人間としての責任を引き受けることのできない負い目を引き受けることになるはずである。とは言っても、保育する者が得をするわけではない。むしろある種の犠牲や諦めは必須の条件である。では、なぜ喜んで保育するのか。それは道楽だからである。深いのである。保育は。

私は今、中井久夫が精神遅滞児について述べた「そのひとの自然に合わせて、そのひとの心のうぶ毛を大切にして育てたならば」という言葉が妙に気に入っていて、そのような保育をしたいものと思っている。そのせいか、子どもも、自らの自然に見合った「人生の美しさ」を彼なりに味わっているようである。

以下は、三歳も半ばになる子どもの最近の保育の一コマである。

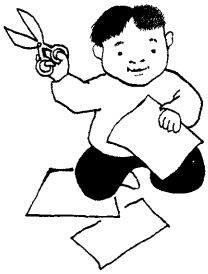
風薫る五月のある平日、朝の家事が終るのを見計らって、子どもが「パパ、誰もいない公園へ行こうか」と言い出した。私は「お友だちがいた方が面白いよ」と説得を試みるが、「つまんないよー」と言って納得しない。そういえば、砂場で遊んでいて「貸して」と言われて、あてにしていた道具をいやいや渡したり、渡すまいとして私に制止されたりで思うように遊べず、とうとう「ぼくはブランコしてくるから、使ってていいよ」と言い捨てて立ってしまったのを何回か見たっけ。砂場でも遊具でも、公園で見る子どもたちは、どうも型通りにしか遊ばず、すぐ退屈してウロウロしているような気がする。その上犬の散歩よろしくママ達が短い手綱をいつも引いているものだから、私の方も何となく腰が引けてしまい、結果的に子どもに気の毒な状況の創出に加担していたかもしれないと反省する。とはいえ、私もあのママ達とうまくやって行こうという気にはなれない。わずかに私がやって行けそうなの

は、アジア系のママや外国人を夫に持つママ達であるが、残念ながらこういったいわゆるマイノリティーの親子と出会う機会はあまりない。ついでに言えば、土日に出会うパパ保育は、おつかい途中の子どものようで、話し掛けるのも何となくはばかられる。そこで、親子ともどももう少し気力がある時に出直すことにしようと考える。

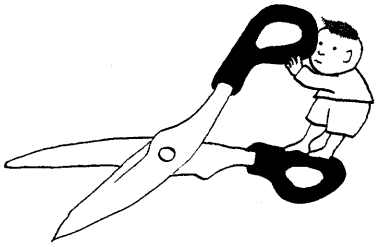
「じゃあ、今日はどの公園もひとがたくさんいるから、また今度にしよう。でも、児童館はすいているから、児童館に行くかい」「行くよ」ということで、児童館に向う。

案の定、その日の児童館はガラガラで、体育館は子ども一人の貸し切り状態。彼は大喜びで、とびたいはねたいおどりたい、とばかりに、歌って踊って走り回っている。飛び箱からジャンプしてでんぐりしたり、平均台を渡ったり、ビニール・ボードを組み合わせたジムに取りつけてあるすべり台をすべったり…、一段落すると、いつもの消防自動車のコンビカーを取りに行き、消防基地を作りたいと言い出す。そこで、ジムの一方の出口にスポンジマットを使って屋根付きの小部屋を作ってやる。彼は、そこで消防自動車をお風呂（？）に入れたり、そこからジムの一階に入り、二階に上がってすべり台から一緒に出動したりしてしばらく遊んでいたが、基地をもう少し大きくしたいと言ってくる。そこで、今度はマットの壁を迷路のようにして拡張し、屋根を立て掛ける形にしてみる。

私の方は、そこに一緒に入って出たところを、その頃にはちらほらやって来ていた男の子の一人と目が合ってしまった。彼は、ウルトラマン・ガイアのT



シャツを着て、何やらポーズをとりながらこちらに近付いて来る。しかたないので、こちらもポーズをとりながら応戦していると、子どもが、「あの子はぼくのおともだちかな?やさしいかな?」と聞くので、「おともだちだよ。ちょっとかわっているけど、やさしいよ」と話してやる。と、男の子がやってきて、「いっしょに遊んでいい?」と聞いてくる。子ども「いいよ、いっしょにあそぼう!」男の子「ぼく、三さいだよ」子ども「ぼく、二さいだよ」私「おいおい（君は三歳だろう…）」「ぼく三さーい」「ぼく二さーい」と何回か言い合ってから、一緒に遊び出す。男の子のママはというと、心配そうに遠くからこちらをうかがっている。二人はしばらくうたったり言葉あそびをしたりしながら追いかけっこをしていたが、「基地がこわれちゃった」と言いに来る。そこで、今度はすべり台を囲んで部屋を作り、屋根をたてかけてやる。今度は、うす暗いすべり台を上ったり、入口で楽しそうに宅急便ごっこなどをしている。そこにバラバラとやって来た二・三歳の兄妹が加わって、ジムは少しにぎやかになった。しばらくすると、どうやら、ウルトラマン・ガイアの男の子が後から来た二人の兄の方を軽く叩いたらしい。メソッと泣きだした。大した様子でもないので話しかけて訳を聞いてやっていると、様子を見ていたらしい兄妹のママが「すみませーん」とか言いながらやってきて、やおら抱えて運んで行ってしまった。と、その時、それまで遠巻きにして見ていたガイアくんのママが走って来て、何やら一声叱ったかと思うと、すべり台のところにいた



彼を叩こうとしたのであった。ところが、叩きそこなって、スポンジマットの部屋はガラガラと大崩壊。おやおや、と私がマットを片付け出すと、「なんでかたづけちゃうの？」と子ども。「こわれちゃったからだよ」「なんでこわれちゃったの？」「たてつけがわるかったんだな」その時、ガイアくんが一言。「ちがうよ、ママがこわしたんだよ！」「…、すみません」とそのママ。

昼も近いので、徐々に片付けながらもしばらく一緒に遊び、子どもの方は、使ったものを片付けるたびに「タンバリンさん、あそこでおやすみするんだよ」「コマさんはここでおやすみするんだ」などと説明を始め、最後には、「ここユカに穴がたくさんあいてて危ないから、帰ろう！　あそこにはおばけがいっぱいいるよ」などと言い出す始末。気持を整理して次に向うためのフィクションなのだろうが、なかなか味なこと（？）を考えるものである。ガイアくんの方はというと、「おじちゃん、いっしょにかえろう」と私の手を離さず、結局彼は我々二人と手をつないで児童館を後にした。「またあそぼうね。バイバーイ」。

途々、「今日は楽しかったねー。すべり台もしたよねー。帰ったら、うさぎさんのすべり台作るんだー」などと子ども。「さて、お腹もすいたから、ソバでもたべるか？」と私。「…たべるか！　いいですねー」と子ども。というわけで、二人はいつものソバ屋に立ち寄り、いつもの石臼で挽いた香り高い田舎ソバと、奥秩父の清水と有機大豆で作ったいつものこだわり豆腐を注文し、ワザヒをおろしながら待つことしばし、この都内屈指の隠れた名店の味を堪能するのであった。子ども「お、きょうはいちだんとおいしいねー」…うーん、人生は美しい…。

（埼玉大学）